

子供とIP

～不登校問題を考える～

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

スクールカウンセラー（SC）が扱う案件の中で、最もポピュラーなものは不登校問題である。今回はこの不登校を考えてみたい。

文部科学省による不登校児童・生徒の定義は、「年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」となっている。この定義によれば、2006年度、その数は12万6,742人にのぼり、全国の児童・生徒の約1.2%を占める。具体的には、小学校ではおよそ300人に1人、中学校では35人に1人が不登校になる勘定だ。

12万人と聞けば、「多いなあ」と感じる方も少なくないと思われるが、欧米では10%前後を占めるのが通常で、日本のこの不登校数は、先進諸国では最も低いと言われる。

かつては、不登校のことが「登校拒否」と呼ばれていたことがあった。これは、不登校を英語に訳すと、「school refusal」となっていたのも一因と言われる。

また、現場で不登校児童・生徒と接していると、「学校へは行かなければいけないと思うし、本当は普通に学校へ行きたい。でも、行けない……」というのが本心に近い。

不登校の原因は何か？ 病気や経済的な理由を除いた長期欠席は、「いじめ」あるいは「性格的な弱さや怠け」が原因だとされることが多かったが、実情はそう単純ではないし、むしろ、いろいろな要因が複雑にからみあっている場合が少なくない。

たとえば、である。ある男子中学生が不登校に陥った。表面上は、級友たちとのトラブルがきっかけだが、取り巻く環境を一つひとつ観察していくと、それが主因ではないことが次第に明らかになる。

彼の家は両親とその祖父母が同居しており、その世代間葛藤が以前から激しかった。その上に、父母との関係も悪化し離婚の危機を迎えたことから、自分の勉強や友人関係に落ち着いて向かうことができず、その葛藤危機に圧倒されて、不登校に陥ったのである。

この生徒は、家族というシステムの病理を代表して症

状を示していると考えられ、専門用語でIP（identified patient）と呼ばれる。私たちの体も、疲労がたまったり不調に陥ると、弱いところに痛みなどの症状が出る。家族や組織も同じである。その集団の力学の均衡が壊れ、歪みが大きくなると、その中で弱い部分が悲鳴をあげる。心の強さと柔軟性に富む大人は、強者としてそれに耐えられ通常の生活が続けられるが、まだ十分でない子供達が、歪みを吸収して破綻をきたすのである。

また、不登校になった原因と、復帰できない原因が同じとは限らない。

上記ケースで言えば、たとえ家族システムが正常に戻り、危機葛藤が軽減されたとしても、復学できる準備は整ったとはならない。長期欠席が続くと、勉強が遅れることによる学力低下が生じ、その結果授業についていけないという二次障害が発生する。それに加え、教室内での交友関係が彼抜きで日々展開されていくことから、クラス内での居場所や絆の喪失が同時にすすんでいくのが通常だ。

不登校問題は、心の問題であると同時に、キャリアの問題でもある。彼と教師及び級友たちと、良い関係をどう再構築していくか、遅れた学力の回復はどうするか、絶望的になりがちな彼らに、立ち足かかる現実の壁とどう直面させていくか、さらに、保護者に学校批判傾向があれば、先生や学校への信頼を回復し、どう協力を得ていくか、また、将来の職業生活とどう結びつけ希望を持たせていくのか等、ハードルはどれも高い。

しかし、そうだからこそ、やりがいも大きい。今年も不登校が長かった男子中学生が、相談室登校を経て卒業式と教室に出られた。避け続けていた級友や担任とも言葉を交わし、最後のお別れを、けじめとしてすることができた。望む高校へ進学することも可能になり、卒業式で涙ぐむ母親と本人から連名で心のこもった感謝の手紙が届く。先生が施す教育という営みが円滑に機能するよう、臨床心理の立場から縁の下で支えるのがSCである。